慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(九)『〔浄土宗仮名法語〕』（長享二年本奥書本）翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.53 (2011. 6) ,p.47- 57
JaLC DOI	10.14991/002.20110600-0047
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20110600-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（九）
『〔浄土宗仮名法語〕』（長享二年本奥書本）翻刻・略解題

恋田　知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『〔浄土宗仮名法語〕』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。[1]

『法然上人行状画図』（四十八巻伝）の抄出本『法然上人念佛教化詞』をはじめ、「道書類」には浄土系の仮名法語が数種類収められているが、本書は、ある女房の求めに応じて念仏の教えを物語のように書き記したとする長享二年（一四八八）の本奥書を有すものである。外題・内題ともに記されず、現在のところ、出典および他伝本の類も確認できないことから、新出の法語と判断される。法然の『一枚起請文』の一節を引き、四十八巻伝所収の法然詠[2]をはじめ、道歌をちりばめながら念仏の教えを平易に説いており、浄土宗のなかでもとくに鎮西系統[3]の法語と考えられる。

本書に引用された計六首の道歌のうち、現在のところ、三首については典拠が確認できる。[4]なかでも特に注目されるのが、「千たひたにわれはかよふにいかなれは日に一度の物うかるらむ」（30オ）の真如堂本尊詠歌で、大永四年（一五二四）に制作された『真如堂縁起』中巻第十段における和歌に共通する。ただし、縁起では、増水で日参が叶わなくなりかけた男に対し、本尊の化身と思われる老僧が当該歌を詠み、男を奮起させたとするのに対し、本書では、念仏行者のもとには阿弥陀が毎日千度訪れるのだから、せめて日に一度は思い出すべきと説く際に、真如堂本尊の和歌としてこの歌が引かれるのである。縁起と本書とではやや異なる文脈で当該歌が用いられており、長享の本奥書を有すことからも、本書が縁起によったというよりはむしろ、縁起の成立以前にすでに本尊詠歌が伝わっており、それを法語と縁起のそれぞれが引用したと考えられる。あるいは、法語が典拠としたような本尊詠歌についての言説をもと

に、縁起本文が起草された可能性をも示しており、『真如堂縁起』のような縁起絵巻の制作実態について考察する上でも貴重な文献といえる。[5]なお、本書の書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近ト―七二―ロ
・形態　写本。一冊。仮綴。
・寸法　縦二〇・一糎。横一四・八糎。
・表紙　本文表紙共紙。楮紙。
・丁数　墨付三五丁。
・本文　半葉五行。漢字平仮名交じり。字高約一七糎。
・外題　なし。
・内題　なし。
・本奥書「長享二年卯月十五日」
・印記　一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

注

（1）陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町　物語草子論』笠間書院　二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子百花繚乱』笠間書院　二〇〇八年）を参照されたい。

（2）「阿弥陀ふと十聲唱てまとろまんなかきねふりとなりもこそすれ」（31ウ）は、『法然上人行状絵図（四十八巻伝）』巻三十「睡眠の時、十念を唱べしといふ事を」に共通する。なお、同じく法然の詠歌とある「後の世ときけはとをきにたれともしらすけふもやその日なるらむ」（9オ）については、出典未詳。

（3）小山正文氏、湯谷祐三氏のご教示による。

（4）前掲注(2)法然歌、真如堂本尊歌、「むさし野も行末ちかく成にけり今夜そみつるやまの端の月」（10ウ）の三首。ただし、「むさし野も」については、「いにしへ和哥の抄物をひらひて見侍りつるに、野径月といへる題にて、為家卿やらんの哥に」とするが、『続古今和歌集』八七九番「入道二品道助親王家五十首に、野径月」とあるように、正三位知家（藤原知家一一八二―一二五八）詠として知られる。現在のところ、為家詠とする「和歌の抄物」にあたるような文献は見いだせていない。

（5）この点については、拙稿「室町の社寺縁起絵―『真如堂縁起』をめぐって―」（『国文学解釈と鑑賞』七五―一二、二〇一〇年一二月）において述べたので、参照されたい。

【附記】
本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げる。
なお、本稿は科学研究費補助金　若手研究(B)（課題番号二二七二〇〇九〇）による研究成果の一部である。

【翻刻】

しつかに一代の心をあんするに、如来の教相の一純ならさるは、衆生の機根の万善なるによれり。ひろくこれをいはゝ、或は漸教、或は

頓教、或は教内、或は教外なり。先、漸教と云は、無量無数劫をへて、難行苦行して漸く仏果にいたるなり。次に頓教と云は、一念のうちに三大僧祇を越て、立ところにさとりをひらくこれ也。次に教内と云は、経論の心を學して、仏のをしへに随て行して佛になる也。次に教外と云は、心をもて心を傳て、我と本来の面目を見る也。かくのことときの旨をまもらんかために、八宗九宗とわかちてこれを沙汰する也。しかりといへとも、倶舎・成実・三論・法相等の宗は南都にのみ有て、世には流布する事なく、天台・真言等の宗は東寺山門の學者のみ此旨を得給へり。當時世に盛なるは、禅法と念仏也。但禅法は機の熟したるまへにはかたからす。しかるに世をみるに、熟したる人はすくなく、熟せさる人はおほし。念仏の一宗は万機をもらさされとも、行たやすきに依て、人これを信せす。當世法華宗と号して日蓮の門下盛なり。法花経をもて依経として一往尼女の耳をおとろかし、結縁の一面をもて即身成仏の旨を談す事相固行ををしへて、理土の果位をすゝむ。凡法花の内證は唯以一大事の因縁なるを、わつかに口に題目をとなへ、手に経

」（1オ）

」（1ウ）

」（2オ）

」（2ウ）

巻をふるゝ、分際は遠く、當来の結縁とはなるとも、即身成仏の儀はかなふへからす。耳をとらへて鼻をかまむかことし。さりとては又いたつらにとりつく道もなくて日を送らむは、欲支入たる事なるへし。無常は念々にいたり、死期は日々にせめきたりぬ。昨日見し人も今日はむなしき屍となり、朝になれしともからも夕にはけふりとのほる。恩愛親子のかなしみも命つきぬれは、一旦これをなけき、夫婦戀暮の情も息たえぬれは、片時もかたらはす。野外に送る時はこゑをあけてかなしめとも、家内にかへる時は人よりもさきにといそく、これみな眼前の事なれとも、あまりにめつらしからさるゆへにおとろくことなし。たま〳〵うけかたき人身をうけ、あひかたき仏法にあひなから、むなしく光陰を送るのみならす、出るいきいるいきまたぬ身を忘れて、人をそねみ、身をかなしみ、おしやほしやとねてもさめても思ふはかりにて、希に珠数をとれとも、来たらさる福をねかひ、わつかに小経をよめともかなはさる事をいのる。さるか又後生も人のためならねは、たま〳〵聴聞の庭に出てゝも、そこの談義はとこそあれ、

」（3オ）

」（3ウ）

」（4オ）

」（4ウ）

」（5オ）

かしこの説法はかくこそあれ、知識のかほか
なにたる、かたるなと誹謗するたくひおほし。
結句地獄もなし。浄土もなし。仏もなし。
衆生もなし。善悪不二なり。邪正一如也。
本来無東西なれは、何のところをかもと
むへきなといふ事を、面白かりて悪をとゝめよ
善を修せよとすゝむるをは、大きにあさむ
くたくゐおほし。人みな善にはそみかたく、
悪にはひかれやすきに依て、やゝもすれは
同心するなり。かく談する道もなきにしは
あらねと、至極大乗のとなへはいみしき
大事なるを、一文不知のやから、口にまかせて
いふ事をえてにひかれて信するは、生得
の心かくらき故也。或は極楽は十万億土の
にしなるを、こゝにてねかはゝいたるへき、かた
ひはゝきをあまたこしらへよなといふ人
あり。哀なるかな、ならはぬことをはかく
思ふ物なり。去レ此不レ遠ととける経文をは
見すや。かゝる邪見のまへには、十万億土と
いふも猶ちかゝるへし。万々億土をもへたつ
へし。思はぬ中そはるけかりけるといへ
るはことはり也。又いはく、玉々極楽にいたり
ても、蓮花の中に十三大劫をくらむは
きつまりなる事かなと欺く人あり。文の
まゝに義をとるは、三世の諸仏のあたなりと

」（5ウ）

」（6オ）

」（6ウ）

」（7オ）

いふ事たゝ此等の事也。一往九品の果を
とくことは娑婆の教門なれとも、実には
平等一味の土也とならひきはむる事は、わか
家の大事なるを、とりもいらぬものか、かゝ
る難を出す也。あなかしこ耳にとゝむへ
からす。とにかくに宗たてはかりにてしみ〳〵と
何の法にもとつく事はなくして、その
間に日を暮して、にはかに道をいそかんは無
益の事かな。幸にれき〳〵たる仏法な
れは、何の法になりともとりつきて、此たひ
出離生死せむと思はさるは、無下にあさま
しき心そかし。寶の山に入て手をむなしく
するといふもをろかなり。只今病苦に
せめつめられて、死門におもむかん時は、かね
てのかくこ悉く乱て、いかにもして此度
はかりはとりのへて、思ふ事をもいひをき、
今一たひことなる子ともにも見参せはや
なんと思ふより外は、別の念慮あるましき
事は人のうへにても見し事なるを
幽々と思ひくらす事は、たゝ愚癡のゆへ
なり。されは、法然上人の御哥に

後の世ときけはとをきにたれとも
しらすけふもやその日なるらむ

と此哥一首にても、なとかおもひしらさらむ、
心にかけぬゆへに、なにこともおほかたにきゝ

」（7ウ）

」（8オ）

」（8ウ）

」（9オ）

なす也。たゝ死せんことをたにも心にかくれは、をのつから欲心もうすくなり、我慢のやむものなり。事のたらさるもよしや、いく程の世そとおもひ、人のうたてきもあはれしはしの身そとおもへは、なくさむ道となる物を、古き哥に

何事も心にものゝかなはぬを
ありはつましき世にそなくさむ

」（9ウ）

といへり。哥道も仏法の便となるとは、かゝる哥なとを身にひきあてゝ思案すれは、まことに道心の種となるなり。此次に拙者かおもひしことをかきつけ侍るなり。いにしへ和哥の抄物をひらひて見侍りつるに、野径月といへる題にて、為家卿やらんの哥に、

むさし野も行末ちかく成にけり
今夜そみつるやまの端の月

」（10オ）

とよめるを吟してみて、あなおもしろや、此哥は浄土の法門によくかなへり。我等無始より此かた、生死長夜の廣野に迷ひ来て、法性難動の山をはるかに思ひつるに、今限りありて弥陀の本願にあひ奉て、接取の光明にてらされ、満月の尊容をおかみたてまつらん事、漸く行末ちかく成けるよと思ひ合て、つねには此哥予か善知識也とおもへは、すゝろに詠せ

」（10ウ）

」（11オ）

らるゝ事の侍りし也。作者はなにこゝろなくそよみ給ふらんなめれと、心にかくる故にかくは見なす也。これは用なき事なれとも、哥をもてあそはむ人のために書つけ侍る也。哥道にかきるへからす。一大事を心にかけん人は何事かめにかゝらさるへき。返々もおもひたきは死の一事也。そのほかの事はなにも所詮なし。大事のまへに少事なしといふ事まことにこれなるへし。日に三度わか身をかへりみよとをしふるは、世間の道にさへあるそかし。まして後生程の一大事を忘れはてゝ、結句我はさのみ罪はつくらぬ物也。人あしかれ共、おもはすさして身よかれとも思はす、涯分出家をも供養すれはよもあしきところへはゆかしなとのへり。観法にて剰一座の座禅をもはかくしくせさる女房なと、われははや輪をいくつ越たるなと利口するたくひあり。あさましき事也。さあれはとて俗人にもあれ、女房にもあれ、末世たりといふとも、得道の人あるましきといふにはあらす、さりなから一法成就の人は、自然にその理そなはり、心口各別にしてえての法門はかりいふものは、又自然に其

」（11ウ）

」（12オ）

」（12ウ）

」（13オ）

失しらるゝ也。志のあらん人は、よく分別
して見るへき也。玉々悪見にはいらす
して善根を修する人も、或は名聞を
本とし、或は礼義にこれを修す。此故に
有漏の善とはなれとも、真実とはなら
さる也。たとひ少年たりといふとも老少
不定とはしらすや。まして四十有餘はゝや
冥途に門出したる身そかし。翠なりし
髪もしろくかはり、紅なりしかほはせの
くろみはてたるありさま、人のうへに見し
時は眉をひそむれとも、身の上になれは
はゝかる心なし。つら〳〵おもへは、いふせきは
わか身なり。種々の不浄をあつめて、かり
に人と名つけたり。凡五種の不浄あり。第一
に種子不浄、第二に住所不浄、第三に自
相不浄、第四に自性不浄、第五に究竟
不浄也。はしめに種子不浄といへるは、人と
なるところの種、男女の愛念より生す。
さらにきよからぬ種なり。第二の住所不
浄といへるは、胎内にやとるところ生熱
二臓のあひたとて、殊外きたなきところ
に、十月のあひたやとる也。第三の自相不浄
と云は、九のあなよりつねにきたなきもの
なかれ出る也。たか身にもおほえたること也。
第四に自性不浄と云は、かわひとへの下を

」（13ウ）

」（14オ）

」（14ウ）

」（15オ）

おもひやり給へ。三十六物の不浄をもて
色々にあやつりたる身也。第五に究竟不
浄といへるは、命つきて後のありさま也。
中〳〵いふもをろかなり。いつしかすさまし
くおそろしくなりいてゝ、あたりへもかゝる
人なく、いまゝてはあたにも人に見えしと
せし人なれとも、なさけなく僧法師に
うちあつけて、はちをも人めをもかへり
みす、あかのはたかになしたる躰は、哀と
いふも中〳〵也。まして山野にひきちら
して、いぬからすのあらしたるありさま、
たとへていはんかたなし。かゝる身を忘れ
いてゝ妻を愛し、子を愛し、たゝいつ
までもなからへいてんとはかり心得て、身
のつかるゝをもかへりみす、心のくるしむ
をも忘て、さ夜のねさめの枕にも罪
業よりほかは思はぬ也。

道なくはせめて哥をもよみはせて
いかにねさめのつたなかるらむ

と古人のよみけるは、はつかしきこと葉也。
東西に馳走すれとも生れつきたる果
報なれは、さらにそのかひなし。世にあるは、
晝夜に遊戯歓楽して、死せん事を忘れ、
数ならぬは、朝暮に後世誑惑の計をめ
くらすとて、死せんことをわする。女は嫉妬の

」（15ウ）

」（16オ）

」（16ウ）

」（17オ）

」（17ウ）

心とこしなへにふかく、男は我慢の心つね
にあり。とにまきれかくにまきれ、忘
るゝ物は菩提心也。ことさら當時世間
をみるに、下は上をあやまり、子は親を害
するありさま、ひとつとし信心をとゝむへ
き事なし。しかれとも、厭離穢土の志
なけれは、欣求浄土の望をもかけす、
當世はわろきものか中〳〵よき時節也。
然に善かましき事をなすものは
わろき也とて、うちにてゝ仏神の物をも
むさほりとるたくひおほし、第六天
の魔王、此界の人の心に入かはりて、かくは
思はする也。ねかはくは、悪心をひるかへして、
わか分際にかなはん仏法を修行して、
此度生死の家を出給へ。上下さたするか
ことく、仏法にせうれつはあるへからす。たゝ
機の相應と不相應とに依て、その益
あるへし。良醫の薬は病のしなに
よりてあらはれ、如来の法は機の熟するに
したかつて盛也とのたまへは、もしわか身
小根小機也と思はん人は、易行易修の念
仏を信したまふへし。そのために弥陁如
来超世の大願をおこし、諸仏の捨給ふ
罪悪深重の衆生を一念十念の名
号に依てむかへとらすんは、正覚をとらしと

」（18オ）

」（18ウ）

」（19オ）

」（19ウ）

誓て、すてにその願成就して、仏になり
給ふ事十劫なり。さてはとなへんものは
往生すへしと、ふかく憑をかけて涯分
心のをよはんかきり、念仏をとなへて、
此度の出離生死は弥陁によりけるよと
ひしと身の上に領解して、行住坐臥
にとなへんことは、やすきか中のやすき法
なり。これをさへ物うくて修せさらん
人は、いつれの道にかもとつき給ふへき。易
をもうたかひ、難をは修せすして思ひわ
つらふうちに、いのちつきなは決定して、
地獄よりほかのゆきところあるへからす、
末世たりといふとも、其機にたへたらん人は、
心地の修行にもおもむき給ふへし。幽々懈
怠はしかるへからす。もとより我身は智目行
足かけたりと思ひしらん人は、はやく念仏
を修すへし。此比念仏を信しかほなる
人も色々のくせをいひ出して、たとひ念
仏を修すとも安心をとり定て、そのうへに
唱てこそ、たゝとなふるはかりは、自力をはなれ
さる心にて、還て往生はせぬ心なりと
云て、高慢なる躰をする人おほし、學
者のうへはさもこそありなん。たゝ尼女の
たくひはほれ〳〵と我身は無始曠功より
此かた流轉生死の凡夫なれ○、今生にても

」（20オ）

」（20ウ）

」（21オ）

」（21ウ）

一善一法もなす事なし。弥陀よりほかは
たれかたすけ給はんと、二心なく本願を
ふかく信し、口に名号をとなふれは、仏
の御ちからにて往生するなりとおもひ、定
てとなふる外に、別の子細はなき也。法然
上人の起請文に、此むねたしかに見えたり。
此起請文は、世に流布してあまねく人の
しり給へる事なれとも、信心のある人
すくなきに依て、かへにも書付て見る
人まれ也。しかるあひた、癡忘にそなへんため
に、此つゐてにかきつくる也。
もろこしわか朝にもろ〳〵の智者達の
沙汰し申さるゝ観念の念にもあらす。
又學問をして念の心をさとりて申す
念仏にもあらす。たゝ往生極樂のため
には南無阿弥陀佛と申て、うたがひなく
往生するそと思ひとりて、申外に別の
子細なし、たゝし三心四修なと申す
事の候は、皆決定して南無阿弥陀仏
にて往生するそと思ふうちに、こもり候也。
此外におくふかき事を存せは、二尊
の御あはれみにはつれ、本願にもれ候へし。
念仏を信せん人は、たとひ一代の法をよく
よく學すとも、一文不知の愚鈍の身に
なして、尼入道の無智のともからに同く

」（22オ）

」（22ウ）

」（23オ）

」（23ウ）

して一向に念仏すへし。
黒谷上人は山門の碩學として十一宗をき
はめ給へとも、凡夫往生の道をは得給はす、
聖人得道の法のみ有て、末代愚鈍の輩は
いかゝせんと歎き給て、一代雑経を八反ま
て高覧し給て、つゐに四十三歳の時、善
導大師の観経の疏に、一心専念弥陀名
号行住坐臥不問時節久近念々不
捨者是名正定言葉順波仏願故といへ
る文に見當給ひて、立ところに余行を
すてゝ、専修念仏の一門をひらきたまへり。大
原にしては、南都北嶺の學者を招きよせ、
天台座主顕真和尚の御發起として、
宗の勝劣をあらそひ、法の淺深を定
て、つゐに諸宗超過の旨を決し給へり。
其より此かた代々の御門をはしめ奉て
貴賤上下此すゝめに依て、往生を
とくる人数をしるへからす。おそらくはこの
上人は勢至菩薩の化現也。たれかこ
れを信せさらん。数輩の碩學その席に
して、忽に我宗を捨て専修念仏の門
に入給へり。大國にも諸宗の人師浄土
門に帰して、一向専念の行を勵して
往生をとくる人勝計すへからす。よも古
来の人師誤て、念仏にはをもむきたま

」（24オ）

」（24ウ）

」（25オ）

」（25ウ）

はし、たゝ眼のひらけたるゆへなるへし。
いはんや、末代の愚魯なんそ上古をかへり見
さらんや。恵信僧都は天台の法燈止観
の行者にてましませしかとも、我はこれ
理即の凡夫也。いまた名字の發心に
及はすとの給へり。當世の學者たれ
か僧都にまさらん。ねかはくは偏執の心を
やめて、起請文のことくやすゝと心得
て若は念々、若は時々、若は日々、涯分を
斗てとなへ給へし。いかにひまなき
身なりとも、日別百反千反となへん事は
やすき事也。日所作にわか分際ほと定て、
其餘は行住坐臥にとなへ給へ。行たやす
けれはとて、不足とは思ふへからす。万徳所
歸の名号なれは、六字の中に功徳と
してのこる事なし。皆人おもふやう、後生
程の一大事を念仏はかりにて、往生
するといふ事はまことしからす。法華經
をもよみそへ、真言をも見てそへてこそ
たすかるへけれ。なとこさかしきことを思ふ也。
本願の心をよくもしらぬ人、此疑をなす
なり。しかりと云て、自余の法をあしき
事といふにはあらす。いつれもたつ
とけれとも、本願を疑て念仏をあや
うく思ふ人の咎をいましめむかため也。

」（26オ）

」（26ウ）

」（27オ）

」（27ウ）

いつれの經をよむとも、六字の名号より
ひらけ出たる諸経也と心得て、念仏をう
たかふ心なくは、いかにもよみ給ふへし。か
なしきかな、念仏の劫をつみ給へとすゝ
むれは、小行のものはむまるましきやとうた
かひ、罪障をとゝめ給へといましむれは、
悪人はいたるましきやとうたかふ思ひとけは
やすき事なれとも、おほくは此うたかひ
をいたく、所詮一念も往生すと心得て
多念にはけみ、大罪も捨給はすと信して、
小罪もおかさしと思ふかやすき心得也。大罪
なを往生す。いはんや小罪をや。一念猶
往生す。いはんや多念をやと思へは、本
願はいよ〳〵たのもしくなりて疑ははるゝ
なり。悪人済度の法なりとて、うちふ
て罪をつくらんもあまりなるへし。
一念往生の行なりとて、日に一度も思ひ
出ささらんは、わりなきあやにくなるへし。
念仏の行者の枕上には弥陀如来毎日
千度来たり給ふと見えたり。かゝるを日に
一度も思ひ出さらんは、冥加もいかゝなり。
真如堂の本尊、

千たひたにわれはかよふにいかなれは
日に一度の物うかるらむ　と

しめし給へり。なにと世務にいそかはしからん

」（28オ）

」（28ウ）

」（29オ）

」（29ウ）

」（30オ）

人も一日にせめて一度数をさためて申
さん事はいとやすき事也。夢の中の
世にさへ身をくるしむるならひそかし。まし
て長夜の闇にまよはん事を思はゝ、たとひ
身を千々にくたき、樹下石上に居せしめ、
草衣木食に命をさゝへてなりとも
もとむ○きを幸に行しやすき法にあひ
なから、いたつらに月日をゝくる事
返々も無念也。いねたまはん時、枕をかたふけ
西にむかひ、手を合て十念となへて
いねたまふへし。いねてそのまゝ死する人
おほし。法然上人の御歌に、

阿弥陀ふと十聲唱てまとろまん
なかきねふりとなりもこそすれ　と

よみ給へり。此哥を心にかけ給へ。あやう
きは人の命也。ゆめ〳〵ゆるかせに思はすして
浄土をねかひ給ふへし。念仏をとなふる
人決定して往生すといふ事は、弥陀
の本願也。釋尊の金言也。諸仏の證
誠也。三仏同心の法をうたかはん人は、大
天魔の心也。更以わか家の仏たつと
しといふ分にはあらす。つく〳〵と思ひ
斗て見給ふへし。世間の道にさへ君
子にはいつはりなし。況尺迦如来三経の
うへに明鏡にときあらはし給ふ現文を

」（30ウ）

」（31オ）

」（31ウ）

見なから猶うたかひをのこさんや。當世
いふ人あり。諸経は尔前の教也。塔をくむ
あし代のことく也。たゝ法花ひとり真
実也と余経をさみし、或は修多羅の
教は月をさすゆひ也。心理の王をみか
きあらはすんはあるへからすとて、念仏を
ひたすらそしる人おほし。それは宗々の
やくそくにて他宗これをゆるさす。法
花より諸教を尔前とたつる事は
天台一宗の了簡也。仏心より教外別
傳ととなふるは、禅門一途の建立也。其か
ことく浄土には諸教を難行と下し、
念仏を易行と勘ふる事、又自宗の
癡立也。能もしらぬことを沙汰せんよりは、
たゝたのむ心をさきとして、本願の名号
をとなへ、極楽をねかひて、此度輪廻
の里を出て法性の都にかへり給
はん事、誠に喜の中のよろこひなるへし。

」（32ウ）

」（33オ）

」（33ウ）

此一巻は伊与國にすみ給へる女房、通春
のもとより念仏の志はあれとも何と
唱て往生すへしとも思ひさため
す、たやすく心得らるゝやうにかきて
たふへき由の給ふあひた、いかにも耳
ちかなる事をかきてつかはす也。然間

」（34オ）

まめやかに要文なとをもひかす、こと
葉をもつくろはすして、物語のやうに
しるしつくる也。ゆめ〳〵外見あるへから
さるもの也。」（34ウ）

長享二年卯月十五日」（35オ）